

2023年春の伝道礼拝

第2回目 5月21日

つながりの中に招く
羊飼い

イザヤ書

第40章11節

ルカによる福音書 第15章1～7節

龍口 奈里子

同じたとえでもマタイとルカで
異なる描写

聖書の中で羊ほど多く登場する動物はいないでしょう。特によく知られているのは、旧約聖書なら今日交読詩編で読んだ詩編23編でしょうし、新約聖書では、野宿の羊飼いが番をしていた羊や、100匹の羊のたとえではないかと思えます。100匹の羊のうち1匹がいなくなり、羊飼いは99匹を野原に残して探しに出たという「見失った羊のたとえ」です。並行記事のマタイによる福音書18章12節以下では、小見出しが「迷い

出た羊のたとえ」とあります。2つは一見同じたとえとして読まれています。ではどうして小見出しがマタイとルカで異なっているのでしょうか。この両者の違いを見ることによって、2つのたとえのそれぞれの意味あいが変わってきます。そもそも主イエスはどちらの方を語ろうとされたのか、と思ったりもします。

両者とも1匹の羊が残りの99匹の羊の群れから外れてしまったという状況は同じです。マタイの「迷い出た羊」という場合は、どちらかと言えば、1匹の羊が自分から群れから外れて迷い出てしまった、自ら迷子になってしまったという感じがしないでしょうか。つまり迷子になったのは、1匹の羊の方に理由がある、厳しく言えば責任があるということでしょう。もう一方のルカの方は「見失った羊」とあるので、見失ってしまった羊飼いの方に原因がある、責任があると語っているようです。

に残して」いるのに対して、ルカは「99匹を野原に残して」とあります。聖書では「山」はエルサレムを指します。つまりエルサレム神殿のある所、聖なる場所です。だから、100匹がつながれていなかった場所はいわば「聖域」であり、この中にいけば安心な場所だということなのです。

一方ルカの方の「野原」とは、ギリシャ語では「エレモス」とい、「人里離れた場所、寂しいところ」という意味です。「イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた」(ルカ5・16)場所もエレモスです。だから、マタイの、聖なる所を指す「山」とはまるで真逆の場所なのです。「野原」は寂しく人里離れた場所で、決して安心な所ではなかったということが言えます。

マタイとルカが異なっているのは、マタイは教会的な視点をもって書いているからでしょう。マタイの言う100匹の羊のいる場所は聖なる場所である教会を指しています。そして、「自ら迷い出た1匹の羊」とは、教会

から迷い出てしまった人、信仰生活から離れてしまった人を指しています。教会から離れてしまった人々を探し求めようとする「羊飼い」としての教会の働きを、このたとえを通して語っているのです。教会という聖なる場所の中にこそ救いがある。だから、そこから離れてしまった人々をまた教会の中に招こうとする、マタイの教会中心的な考えがあるのだろうと思います。

一方ルカはマタイのように、100匹のいる場所を聖なる場所とはしていません。あくまでも「野原」です。ルカはあえて教会という場所に限定しないで、大きく社会の中での羊飼いと羊たちとの関係を語ろうとしているのかもしれない。

当時の徴税人や罪人と呼ばれる人たち、異邦人たち、女性たち、子どもたち、そんな人々をも含めた100匹の羊なのです。100匹集まると、多数と少数に分かれて、その囲いから排除されてしまっている人がいます。しかし羊飼いは99匹の方ではなく、少数の中のため

た1匹の「見失った羊」の存在に目を注ぎ、見つかるまで探し出すのだと語っています。それが羊飼いなる主イエスの存在なのだと言えるのです。

主なる神様は、「誰一人取り残さない」

今の言葉で言うなら「誰一人取り残さない」というキャッチコピーになるのかもしれない。これは、国際社会が2030年までに目指す17の持続的な開発目標(SDGs)に掲げた理念であり、これを達成するために、少数者、マイノリティに配慮することが求められています。少数者の中には、障がい者、LGBTQ、外国人などが含まれますが、現実はどうでしょうか。

名古屋入管で死亡したウィツシユマ・サンダマリさんをめぐって、ある国会議員のトンでもない発言が大きなニュースとなりました。「病気になるれば仮釈放(注:正しくは仮放免)してもらえないという淡い期待を抱かせ、医師から

詐病の可能性を指摘される状況につながった恐れも否定できない」とか「ハンガーストライキによる体調不良で亡くなったかもしれない」などと発言したのです。これは亡くなってもさらにウィツシユマさんの人権を侵す発言です。そしてこれが私たちの社会の現状でもあります。「誰一人取り残さない」どころか、私たちの社会は、声の大きい、あるいは自分は自立している、健康であると自負する人々が多数となる社会です。しかしもしそれが99匹の羊たちならば、そこから排除されてしまう1匹の羊が必ずいるのだということです。決して自らの責任で困いから出て行ったのではなく、多数から除外され、はじき出されてしまった1匹の羊。それは、主イエスが食事を一緒にされた徴税人や罪人と呼ばれる人たちであり、「神の国に一番近い」と言われた子どもたちなのです。

ルカとマタイのたとえでもう一つ異なる点があります。羊飼いが1匹の羊を探し出した後の行動です。マタイの羊飼いは、1匹の羊

の帰還を喜びとしているだけなのに対し、ルカの方は「見失った羊」のたとえに続いて「無くした銀貨」と「放蕩息子」のたとえをつなげ、1匹の羊、1枚の銀貨、放蕩息子が自分のもとに帰って来た時、羊飼いや銀貨の持ち主も放蕩息子の父も、友達や近所の人たちを呼んで喜びの席を準備し、その場所

に「見失った羊」をもう一度招き入れるところで終わっているという点です。それは徹底して、迷い出たものを探し出すとする神の姿であり、神様から離れたと思いついでいる人たちを、神の祝宴になげようとす主イエスの姿なのです。さらにルカでは、羊飼いが1匹の羊を家に招き入れるとき、その羊をかついで家に入つてゆきます。ここにいる私たち一人一人もまた、主イエスに探し出されて、主イエスにかつがれて、喜びの輪の中へと、主イエスの体なる教会の中へとつながれ、招かれた一人一人なのだと意識することでしょう。

「見失った1匹の羊」を見つけたとして、つながりの中へ招いてくださる羊飼いなる主イエス。この喜

びの席に私たちも今こうして共にいます。詩編23編に「あなたの鞭、あなたの杖はわたしを慰める」というみ言葉があります。この「鞭」とは羊を叩くための道具ではありません。鞭の音で羊は羊飼いが自分と共にいることを知って安心するので。「誰一人取り残さない」主なる神は、見つけ出すまで探し続けてくださる。だから私たちは辛さや苦しみを受けていても生かされるし、招かれているものの喜びを通して、悲しんでいる人々の生活の隅々にまで主が共におられることを信じ、その一人一人を招くことができるのです。

私たちの教会は、聖域のような「山」ではなく、ある時は人里離れて祈る「野原」です。たった一人の存在に目を向け養ってください。主イエスに倣う、そういう一人一人として、喜びに溢れた交わり場所として、この教会が用いられることを祈り、願いたいと思います。

(出席42名、Zoom7件。文責編集委員会。要約・島野三千代)